

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論 文 題 目

クルー・チャットンの生きられた歴史にみる  
 ポル・ポト政権期後カンボジアの初等教育  
 —地方都市における教師への聞き取り調査から—

氏 名

千田 沙也加

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ポル・ポト政権期後の国家の復興・再建期であり、社会主義体制下であったカンプチア人民共和国期（1979-1989年）の初等教育に着目し、政策史研究だけでは明らかにできない個々の教師による生きられた歴史を検討し、この時期の初等教育再建の意味や価値をローカルで個別的な観点から明らかにすることを目的としている。特に、ポル・ポト政権期後の初等教育再建のために教師の資格を問わずに、緊急の対応で教師に任命された人々であるクルー・チャットンたちに注目した。クルー・チャットンの経験と認識を歴史的な時間軸に沿って編集したライフヒストリーと、発話を逐語訳した語りを合わせて「生きられた歴史」とし考察の対象とした。緊急の対応で初等教育再建に携わったクルー・チャットンには一体どのような人びとがいたのか、その背景と特徴を明らかにし、彼／彼女らが経験し認識した初等教育再建の特質を明らかにすることを分析の中心的な視点とする。

本論文は、序章、第1章から第6章、終章から構成される。第1章から第3章を第1部とし、人民革命党政権が目指した初等教育の検討を主眼とした。第4章から第6章を第2部とし、クルー・チャットンの生きられた歴史へと視点を移して考察を行った。

序章では、人民共和国期の教育を中心とする先行研究の意義と問題点を批判的に検討し、本論文の課題と射程を示すとともに、本論文の中心的な研究対象であるクルー・チャットンの背景を確認した。加えて、クルー・チャットンの生きられた歴史を検討する本論文の学際的な位置づけ、および調査の方法と特徴を示した。本論文が対象とする「クルー・チャットン」とはポル・ポト政権期前の1975年までに学習経験を有することが一つの大きな特徴であり、1979年から正規の教員養成が配属される1984年までに緊急的に

任命された教師たちである。これまでの国際教育開発を中心とした先行研究では、ポル・ポト政権期の負の遺産を抱えて「読み書きのできる者ができない者に教える精いっぱいの状態」だったというクルー・チャタンに対する固定化されたイメージがみられた。こうした外側からの認識に対して、クルー・チャタン自身の生きられた歴史からポル・ポト政権期後の教師の歴史を再検討する本論文の意義を示した。

第1章では、人民共和国期の初等教育の背景として、カンボジアの教育の歴史的展開と、人民共和国の国家体制および教育政策と教員養成制度を素描した。カンボジアの教育史を概観した結果、フランス植民地期におけるフランス語による教育から、独立後の教育のクメール語化、そして内戦による混乱とポル・ポト政権による教育制度の断絶を確認した。さらに人民共和国期から移行期を経て国際教育開発が大きな影響力を持つ現在に至るまで、クルー・チャタンは幾度も政治体制の変化とそれに伴う教育制度の変化を経験してきたことを示した。また人民共和国期の国家体制からは、一党独裁を行った人民革命党政権がポル・ポト政権と同じルーツを持つことを明らかにし、ポル・ポト政権との相違点として、ベトナムとの親密さと東側ブロックに認められうる社会主義国を目指したことを考察した。

第2章では、政権が構想した初等教育のあり方の特徴を、政権側が発行した機関紙『カンプチア』を用いて考察した。考察から、同紙が教育再建の素晴らしい成果を伝えることで、目覚ましい教育再建の進展が国の再建を示す成功例と位置づけていたことを明らかにした。また、機関紙『カンプチア』で描かれた教育再建像の基軸を、カンボジアの伝統的な価値観に求めるのではなく、東側ブロックに認められうる社会主義の思想に求めるしか選択がなかった政治状況を含めて明らかにした。こうした思想的な背後には、ベトナムの影響があったと考えられるが、記事からみる限りベトナムとの同調や同化は目指されておらず、あくまで支援者として描かれていた。

第3章では、1980年『普通初等教育カリキュラム』の特徴を検討した。カリキュラムの検討からクメール語と「労働」が主要な教科であることを明らかにした。まず、クメール語の学習時間が他の教科に比べて顕著に長く、重要な学習時間とされていたことを指摘した。カリキュラムにおいて、クメール語は「クメール民族」のアイデンティティを象徴せず、あくまで国民の言語として位置づけられていた。また、恐怖や憎悪をあおることで感情的で単純化された反ポル・ポト思想の形成がクメール語教育の目的に含まれていた。ここにはルーツが同じであるポル・ポト政権に対して思想や歴史を直視した克服を目指さない人民革命党政権側の姿勢が表れていることを指摘した。また、カリキュラムにおいて「労働」が複数の教科の目的と関連があり、教育の目的そのものとも深い関わりのある、主要な教科と位置づけられていた。「労働」は社会主義の思想に基づいた主要な教科であり、学校と家庭、そして地域社会を結ぶ役割が構想され、生産的な「労働」と団結を学ぶ「労働」が求められていた。

第4章以降では、本論文の主要な考察対象であるクルー・チャタンの生きられた歴史に焦点をあてた。第4章では、(1) ポル・ポト政権期前に小学校教師の経験があり、

何度も引き抜かれた経験のあるMP先生、(2)小学校のクルー・チャットンになってから、コンダール州の教育局長まで経験したLCT先生、(3)青年組織の代表からクルー・チャットンになり小学校長まで務めたHH先生、(4)クルー・チャットンであり村で最良の小学校教師といわれるに至ったUK先生の4名のライフヒストリーを記述し、個別の生きられた歴史にみられる特質を考察した。(1)MP先生はポル・ポト政権期以前に小学校教師の経験のある高学歴のクルー・チャットンであった。しかし、人民共和国期に小学校で教え始める前に、他のクルー・チャットンと共に短期研修を受けた経験があった。(2)LCT先生は、ポル・ポト政権期前にプノンペンで医大生だったが、ポル・ポト政権期に自分が生まれ育った村に戻ると、無知で貧しい若者がポル・ポト派として支配する姿を目の当たりにした。ポル・ポト政権期後には、その村の小学校教師として教育者の道を歩んだ。(3)HH先生は、ポル・ポト政権期後に青年組織で活動するうちに、町の子どもたちに対する教育の必要性を認識しクルー・チャットンとなった。(4)UK先生は、学歴の低いクルー・チャットンであったが、自らの学習経験を応用するとともに、状況に順応する努力を惜しまない「良い教師」だった。同章で検討した4名のライフヒストリーからは、これまでの固定化されたイメージと全く異なる高学歴のクルー・チャットンや「良い教師」としてのクルー・チャットン像が明らかにされた。

第5章では、考察の対象とするクルー・チャットンの数を増やし、人民共和国期の初等教育にかかわる彼らの経験と認識の特質を検討した。同章では、クルー・チャットンが小学校教師になった際に保有していた学歴は様々で、尚且つ教師になる際の短期養成訓練の期間と保有する学歴には関係がなく採用されていたことが明らかとなった。これは、人民共和国期の初期の小学校教師には学識の高いクルー・チャットンも含まれ、彼／彼女らが教育再建の基礎を築いたことを示唆する。加えてクルー・チャットンたちには、このように採用された全ての教師を含んだ緩やかな共同体意識があった。さらに、クルー・チャットンの生きられた歴史にみられた共通する特質として、ポル・ポト政権期より前の学習経験に対する肯定的な認識や、彼らの肌感覚としてポル・ポト政権期より前の小学校教師に比べて、人民共和国期における小学校教師の社会的地位が低下したという認識を明らかにした。

第6章では、第3章で考察したクメール語と「労働」に「政治道徳」を加えて、クルー・チャットンの生きられた歴史を分析し、これらの教科にいかなる意味や価値が与えられたかを考察した。クメール語教育の意義として、基本的な言語能力を獲得する重要性が、目の前の子どもに対する必要性として語られた。また、クメール語教育にクメールの文化を理解し伝承する重要性があるという語りを得た。さらにこうしたクメール語教育の文化における重要性は、クルー・チャットン自身が学習したクメール語教育にも、現在教えているクメール語教育にも重ねられる普遍的な価値づけとして語られた。クルー・チャットンは政権が用意した教科書を用いて教育を行っていたはずであるが、クメール語教育において反ポル・ポト思想を重要視していなかった。その一方で、政権が構想した反ポル・ポト思想の形成は、特に元児童に対する聞き取り調査によれば、ポル・

ポト政権期後という社会的背景に紐づけられた人民共和国期に特殊な教科である「政治道徳」の学習内容として、相対的に認識されていた。

同章ではまた、「労働」に関するクルー・チャットンと元児童に対する聞き取り調査から、それぞれの現実における意味や価値の違いを考察した。クルー・チャットンたちは、新しいカリキュラムにみられた社会主義の理念を反映する重要な教科として「労働」を認識しておらず、共通して「労働」に対する教育的な価値づけがなされていなかった。それどころか、クルー・チャットンたちはポル・ポト政権期にこそ「労働」と教育に強固な結びつきがあったと認識していたことが明らかとなった。一方、元児童に対する分析から、「労働」で野菜を栽培してそれを持ち帰り売るなどという経験を、楽しい思い出として認識していた。これは「労働」を通して生きることを学び、さらに集団での「労働」で団結する喜びを学んでいたことを示唆する。さらに、元児童が「労働」で学ぶことができたのは、クルー・チャットンが教育現場で実践していたためであり、このことから「労働」において、カンボジアの伝統的な社会主義とつながる「分かち合う」精神を伝える重要な意味があったことが導き出された。しかし、教師が「労働」に無関心だったために、「労働」の実用的な価値を失うとともに、教育現場における取り組みが失われていったことを明らかにした。

終章では、以上の考察を通して本論文の総括をした。

第一に、人民共和国期の教育に関する先行研究ではベトナムの影響が議論の中心に据えられていたが、本論文の考察からは政権が構想した初等教育においても、クルー・チャットンの生きられた歴史にも教育の「ベトナム化」はみられなかった。政権が構想した初等教育が「ベトナム化」されていなかったため、教育現場においてもその教育実践が「ベトナム化」されることはなかった。教育再建の現場レベルではベトナムの影響力はほとんどなかったというのが端的な結論である。

第二に、クルー・チャットンは自らの学習経験を応用し、初等教育現場に順応することで教育再建に携わっていた。そもそも政権側による「できる人ができない人を教える」というスローガンを、クルー・チャットンは自らの学習経験を役立てる意味で解釈していた。そしてクルー・チャットン自身の主体的な意志をほとんど反映させることなく「引き抜かれた」教育現場に順応できる「良い教師」となるための対応をしていた。これに対し同章では、応用し順応する「良い教師」を越えて、教育に意味や価値を与えて形作る経験をした教師をカンボジアの知識人の例として紹介し、その重要性を論じた。

最後に、本論文が考察の中心としたクルー・チャットンの生きられた歴史の比較教育学研究における意義を再考した。クルー・チャットンの生きられた歴史は、文脈に依存した意味や価値を個別にもつ歴史である。こうした「小さな物語」による比較教育学を「小さな比較教育学」とし、本論文はひとつの「小さな比較教育学」の企てであったとした。つまり、本論文は比較教育学における物語的転回を試みたものである。こうした個々の生きられた歴史による「小さな比較教育学」は、読み手の「自己の物語」に新たな知見を提供する可能性を示唆した。

